

佛舎利相承系圖と日宋交通との連関

森, 克己

<https://doi.org/10.15017/2339055>

出版情報 : 史淵. 40, pp.51-68, 1949-03-20. 九州大学法文学部
バージョン :
権利関係 :

佛舍利相承系圖と日宋交通との連關

森 克 己

ヨーロッパ中世紀十字軍の從軍者達は、パレスチナより本國へ凱旋の際には、キリストの被つた荊の冠の破片とか、或はまた聖母マリヤの遺物とかいつたものを數多携へて歸つた。それで十六世紀の頃フランスのある僧院にはキリストの涙を納めた硝子瓶といふものがあつたし、またある教會にはキリストの吐いた息を容れたといふ硝子瓶が秘藏されたりした。そしてイギリスに持ち歸られた所謂キリストの遺物のあるものは、イギリス國內の聖地を創造する役割をさへつとめてゐるのである。たとへばグロスター州の Hayles Abbey の True Blood 聖廟などはその一例である。Heath Sidney: "Pilgrim life in the middle ages, Introductory" としてこれは獨りヨーロッパに於てのみ見られるのではなく東洋に於ても見出し得る普遍的な現象である。たとへば十四世紀の初期、東洋に來たアラビア人イブン・バツータの旅行記の中の印度のセイロン島の佛足石に參詣した一節には嘗てある時支那人がこの聖地に詣でて佛足石の拇指の部分を缺き取つてその本國に持ち歸り、廣州の某寺院に安置した。その結果この佛足石の缺片を拜まうとする人々は支那遠近各地よりこの寺院へ巡禮してゐるのである。Samuel Lee: "The Travels of Ion Batuta," p. 190

と記してゐる。そしてこのやうに遙か外國の聖地を慕ひ、その聖地より持ち歸へられた遺物・記念物等を崇拜し、それらを通して敎祖を信仰し、またこれによつて遺物を安置した場所が聖地となるやうになつた例は、我が國に於ても見出されるのである。即ち日宋交通の初期の頃には、大陸の五臺山信仰が盛んで、僧侶達の間には大陸に渡り、五臺山に詣でて文殊菩薩の示現を拜し罪障の消滅を計らうと願ふ者が多かつた。中には海を渡ることは容易ではないから、自ら梵字尊勝陀羅尼を書し、また齒一枚を抜いて其の經卷の軸に納め、これを商船に託して五臺山に送り、それによつて惡業や重罪を消滅しやうと企てたものすらあつた。

覺鑿清涼記 この一般渴仰の的であつた大陸五臺山參詣を遂げ、寛和二年歸朝した入宋巡禮沙門齋然は、宋より文殊像・十六羅漢繪像・資無憂樹・菩提樹葉・荼羅葉・南岳大師の拜した普賢菩薩・五臺山の石等を携へて歸

朝し、嵯峨の栖霞寺に安置したので、五臺山信仰熱よりして、所謂嵯峨詣でが流行するやうになつて來たのである。

左經詔長元
四・九・一八

また唯に佛像や樹木ばかりではなく、五臺山の砂までも輸入されて、五臺山信仰の熱を煽つたのであつた。台記久安三・六・一九 ところが五臺山信仰が昂揚された結果、五臺山の石や砂までも將來されて信仰の對象となり、聖地所謂靈驗所を生んだと同様に、矢張り海外より將來されて人々の信仰生活に大きな影響を與へたものに佛舍利がある。次にこの佛舍利に就いて一つの興味ある史料を呈示しよう。

滋賀縣犬上郡敏滿寺村胡宮神社には「近江國敏滿寺佛舍利相承圖」といふものがある。それは、

佛舍利相承

前白河院 自青玉山一千粒被渡之、
自雁塔山一千粒被渡之、

姉 祇園女御殿 以此御舍利御最後時被奉女御殿了、

妹 房 被召于院懷妊之後刑部卿忠盛賜之、
為忠盛之子息云清盛、仍不號宮矣、

太政大臣平朝臣清盛 女御殿以清盛為猶子、
併被奉渡此御舍利矣、

主馬判官、盛國子息也、

觀音房 號南無佛、此御舍利之預也、然大相國早世之後、雖奉渡內大臣平宗盛卿、尙觀音房預之、內大臣鑲西隨却之間觀音房奉持之云々、

禪花房

盛尊 自觀音房手奉感得千五百粒、

阿闍梨政尊 自觀音房手奉感得百三十粒了、

攝政從一位前左大臣 道(家)、自禪花房手少々在御奉請 文曆二年二月十六日

備中少將 自禪花房手三粒被奉請云々、

民部大夫忠康 三粒奉請云々

佛舍利相承系圖と日宋交通との連關

佛舍利相承系圖と日宋交通との連關

當麻寺 三粒奉納（當麻寺以下至安倍爲親書次）

壹岐前司宣業 二粒奉請

薩摩公能眞 三粒奉請

大膳權亮安倍爲親 一粒奉請

敏滿寺 三粒奉納（敏滿寺以下四行、文永元年三月廿四日書次）

舍利講式一卷二品 佛舍利五粒奉納比丘尼如理
文永元年三月廿日安置之

奉施入敏滿寺阿久野玉一粒沙彌玄祐

願以此沙汰普及於一切我等與衆生同生一佛土、

文曆二年七月 日 文永元年三月廿四日

といふのである。

敏滿寺といふのは聖德太子草創の淨場、慈證上人經行の仁祠と稱せられ、東寺天台顯密兩宗の流れを汲み、堂舎四十餘宇、寶塔數箇、此の内西福院・西迎院は藻巖門院の御願所、法行院は龜山院御願所であり、延慶二年には御祈願所となつてゐる由緒の舊い寺であつた。

胡宮神社文書延慶二・二・五・太政官牒 として舊くから佛舍利が

安置され、それに加へて建久九年には更に東寺の空海請來と傳へる佛舍利も一粒安置されたことは俊乗坊重源の佛舍利送狀によつて知ることが出来る。

胡宮神社文書建久九・十
二・十九・佛舍利送狀

この佛舍利相承系圖に於て特に注目すべき點は、白河院が育王山と雁塔山から佛舍利各々一千粒づゝを將

來したといふことである。阿育王經によれば、佛敎興隆の功勞者阿育王は佛舍利を八萬四千塔に分納し、部内各地に埋藏した。ところが、廣弘明集五十一によれば、中國にはこの阿育王塔が十七箇所に、また法苑珠林三十・佛祖統紀四十によれば十九箇所に藏せられたとされ、就中、浙江省寧波府の育王山は道宣の感通傳・法苑珠林八十・唐大和上東征傳・佛祖統紀五十・寶慶四明志三十等によると、晋の太康二年（一説には秦始皇元年）并州離石の劉薩訶が阿育王八萬四千塔の一基を發見した處であるとされ、南北朝の晋の義熙元年精舍を建立し、梁の武帝より阿育王額を賜はり、宋の文帝元嘉元年罽賓國沙門曇摩密多が阿育王寺塔を建てた。

次に雁塔山であるが、大唐西域記卷九によれば、中印度摩揭陀國因陀羅勢羅窣訶山の東峯伽藍の前に、雁の供養のために建てた窣堵波あり、これを雁塔といふと見えてゐる。中國では温州樂清に雁蕩山あり、山頂に大池あつて雁これに蕩すと傳へられ、北宋の祥符年間伐木者によつて見出された。佛祖統紀 四十四 東福寺塔頭栗棘庵

所藏南宋末作製刻石輿地圖拓本にも此の山が載つてゐるところより見れば、當寺開えた名山だつたであらう。そこで雁塔山の塔の字は蕩の借字かとも一應考へられるが、この山が肝心の佛舍利と關係があるといふことは何等の據證がないから、取上げるわけには行かない。次に考へられるのは西安府大慈恩寺の大雁塔である。三藏法師傳卷七によれば、唐の永徽三年玄奘の發願によつて造立され、玄奘が西域より將來した經像を安置し、その散佚・火難を恐れて甃を以て造り、基面各々百四十尺、高さ百八十尺、西域の制度に倣つて五層とし、各層に皆舍利を安置したといつてをるから、或はこの大慈恩寺の大雁塔を指したものではなからうかとの考へも浮んで來るが、しかしこれも印度の摩揭陀國因陀羅勢羅窣訶山と同様大慈恩寺を雁塔山とも呼ん

だといふ確證がない限り、直様これを佛舍利相承系圖に所謂雁塔山とするわけには行かないのである。いづれにせよ、釋迦身眞舍利の所在地としては、雁塔山よりも育王山の方が一般的であり有名である。殊に育王山の名は大陸に於ける佛舍利崇拜熱の昂揚と共に次第に喧傳されて來た。

一體大陸に於ける佛舍利崇拜は、東漢の明帝永平十四年阿育王佛舍利塔の一基と稱せられた洛陽白馬寺の佛舍利を拜して九層二百尺の塔を建て、北齊の隆化元年白馬寺の佛舍利塔を修理せしめる等の例によつて見られる如く、已に南北朝の頃より勃興して來たのであるが、隋唐を経て宋代に至ると愈々白熱化して來た。次に佛祖統紀に見える佛舍利關係の記事を表示すると

<p>太平興國三年</p>	<p>開寶寺沙門繼從等、西天竺より、梵經・佛舍利塔・菩提樹・孔雀尾拂を將來獻納す。 供奉官趙鎔を吳越國に遣し、明州阿育王佛舍利塔を奉迎せしむ。 吳越王錢俶、宋に歸屬し、僧贊寧をして佛舍利塔を携へ入朝せしむ。</p>
<p>端拱二年</p>	<p>開寶寺の八隔十一層三十六丈の寶塔八年の歲月を費して功なる。太宗自ら塔下に阿育王佛舍利塔を安置す。</p>
<p>咸平六年</p>	<p>西天竺三藏法護來朝、佛舍利・貝葉梵經を獻す。</p>
<p>景德二年</p>	<p>西天竺沙門衆德來朝、佛舍利・梵經・菩提印を獻す。</p>
<p>同六年</p>	<p>開寶寺福勝塔に金色光出現、直宗臨幸、靈感塔の號を與ふ。 京師天清寺興慈塔に佛舍利出現、詔して像教嘉祥生民の福と稱す。</p>

同 六年	西天竺沙門知賢等來朝、佛舍利梵經を進む。 佛舍利、玉清昭慶宮聖祖明慶殿に現はる。
同 九年	北天竺優填曩國沙門天覺・南天竺師子國沙門妙德・西天竺迦蹉國沙門等來朝各佛舍利・梵經を進む。 沙門經全等、西天竺より佛舍利を將來、揚州に塔を建つ。
天聖 九年	太祖・太宗嘗て宣律師の佛牙を火に投じてその眞僞を驗す。眞宗も亦これを開寶寺靈感塔下より迎へ、三佛齊産の薔薇水を注いで眞僞を驗し、穴中より五色の舍利一個を得。
嘉祐 元年	相州太守李復圭、龍興寺塔基を發掘して佛髮舍利を得、殿樓を建て、これを藏す。
紹聖 三年	袁州仰山に高さ二十丈の舍利石塔自然出現す。
元符 元年	袁州木平山に舍利石塔自然出現、夜五色虹光を放ち、丈六佛出現す。
建中靖國三年	相國寺三朝御讚釋迦佛牙を宮廷に迎へて供養す。水晶匣を隔てて舍利兩點の如く出現す。
淳熙 三年	孝宗舍利を碧琳堂に迎ふ。塔角に光あり、金珠の如し、塔に納めて山に還す。

以上の表によつて明かな如く、宋代になると佛舍利に就いての色々な不可思議な現象が喧傳され、皇帝自ら瞻禮して、これに油を注ぐが如き態度を示してゐる。またこの宋代の風潮に迎合するか如く天竺僧乃至中國僧によつて天竺より續々佛舍利なるものが將來され皇帝に獻納されてゐるのである。をしてこうした風

潮に乗つて、育王山の存在は益々明確になつて來た。即ち宋大中祥符元年には眞宗より廣利寺の號を賜はつてゐる。尤も大覺禪師懷璉・佛照禪師德光の如き名僧がこの山に住し、宋帝室の歸依を受けたといふこともこの山を盛んにした一助とはなつてゐるが、

四明圖經九・渭南文集十九「明州育王山買田記」・寶慶四明志十三

何んといつてもこの山を有名にしたのは、この山には釋迦如來身眞舍利塔があり、塔の内部に一角金鐘があつて舍利を納めてをつたからに

ほかならない。さればこそ高宗より「佛頂光明之塔」といふ宸翰の號を賜はり、淳熙二年にはこれを禁中に取寄せて禮塔會を行つたこともあるのである。寶慶四明志十三 阿育王山廣利寺

ただに宋帝室の歸依が篤かつたばかりではなく、一般民衆の信仰をも聚めてをつたことは、我が入宋僧でこの山に參詣したことのある重源が九條兼實に語つて「宋人の阿育王山に對する心は信心を以て先とする。

僧侶や俗人が五百人千人と徒黨を組んで同時に精進を始め、猛利の淨信を起し、三步一禮をなして參詣する。其の路は遠くはないが、或は三月、或は半年も費してその山に達する。參着の後は皆悉く釋迦の寶號を奉唱し、ひたすら阿育王塔の中の佛舍利が示現するところの神變を禮拜せんものと祈願を凝らすのである。

しかし神變は人々の罪業の輕重に依つて現れたり現れなかつたりする。そして此處に參詣する宋人達の信心は實に殊勝なものである。しかるに我が朝の人々の信心は、宋人に比して到底及ばないのは返す返すも殘念の極みである」と述べてゐることからも窺ひ知ることが出来る。王業壽永二 尚ほこの宋人達が育王山參詣の際唱へる釋迦の寶號は、私が嘗て金澤文庫で發見し、學界に紹介したことがある。「日宋交通と阿育王山」要するに所謂佛舍利は、佛祖統紀にいふが如く、眞身應物示化の一法として利用されたものであり、就中、育王

山の佛舍利はそれが貿易港明州の近傍に所在するといふ地理的地位の關係上、中國のみならず、海外にまで夙くから聞えてゐた。たとへば、唐の大中年正月齋日に阿育王山に於て四明の僧俗八千人が佛舍利供養を行つたところ、明年新羅僧が佛舍利を盗み取らうとして舍利塔を手に攀げたところが、亭の周りを廻るのみで、その場所を離れることが出来ず、遂に衆徒に覺られて失敗してしまつたといふ説の如きはその一例である。佛祖統紀四二法運
通塞志一七之九

纏つて我が國に於ける佛舍利信仰は如何であつたか。日本書紀敏達天皇紀十三年、佛法がはじめて我が國に入つて來たことを記した條に、蘇我馬子が佛殿を建て大會を行つた際、司馬達等が齋食の上に佛舍利を見出し、これを馬子に進めたので、馬子は鐵鎚を以て打つたが碎き得ず、水に投ずれば自在に浮沈させることが出來たので、驚異の眼を見張り、これより佛殿を造つて深く佛法を信するに至つたとあるのが我が國に於ける佛舍利の初見で、その後聖德太子も二歳の春佛舍利を感得し、その佛舍利が上宮王院寶藏に藏されてゐたことが太子傳古今目錄抄に見えてゐる。以上の感得のほかに、海外より將來したものとしては、天平勝寶六年鑑眞が來朝の時、如來肉舍利三千粒を將來した。唐大和上
東征傳 空海も亦來朝の際には佛舍利八十粒（就中、金色舍利一粒）を齎した。東寶
記二 また中國では、たとへば大唐西域記に見える勝軍論師の香泥小塔の如く莫大な數量に上る小塔を造ることが流行し、この流行は我が國にも入つて、天平寶字八年惠美押勝の亂が鎮定すると共に、稱徳天皇の勅願で木製小塔百萬基を造り、十大寺に分納したことは有名である。

阿育王塔と我が國との關係に就いては、法苑珠林卷五十一に、唐の貞觀五年（舒明天皇五年）、日本の官人

會承が道俗七人と日本に歸らうとする際、長安の大徳と日本の佛法の事を問答した。大徳が「經の所説によれば、佛滅百年後、阿育王が佛舍利を納めた塔を一萬四千基造り、一億家に一塔の割で廣く閩浮洲に配布したが、日本にも右の塔が在るか如何か」と尋ねたところ、會承が答へていふには「日本の文獻には阿育王塔のことは見えてをらない。しかし日本で土地を開發すると往々古塔・露盤・佛儀相を得ることがある。そしてそれが屢々神光を放ち種々の奇瑞を現す。故に已に阿育王塔は存在してをるものと考へられる」といつてゐるが、明らかに阿育王山の影響と見られる小塔が日本に入つたのは吳越王錢俶の造つた阿育王塔である。これは阿育王山を其の領土内にもつた錢俶が阿育王佛舍利塔を尊崇のあまり、金銅精鋼を以て八萬四千塔を造り、一切如來心祕密全身舍利寶篋印陀羅尼心呪經をその中に藏めた。佛統紀四十三この經は唐の大興善寺沙門不空三藏の翻譯したもので、この經の呪功に、

造像造塔者、奉安此呪者、即成七寶、即是奉藏三世如來全身舍利、

とあることにより、この經を以て佛舍利に代へたのである。そしてこの莫大な數に上る造塔は凡そ十年程の年月を費してその功を訖へ、これを廣くその部内に散布した。

ところがこの吳越王錢俶の造つた阿育王塔の一基は、天曆年間に入唐僧日延によつて我が國にも將來されたのである。安藝西福院所藏一切如來心祕密全身舍利寶篋印陀羅尼經かくて阿育王山信仰が漸く我が國にも波及して來、永延二年には慈

徳寺に於て八萬四千泥塔供養が行はれてゐる。小右記永延二・八・七また元亨釋書卷十一の寂禪傳には、治曆三年示寂

した寂禪は、近江蒲生郡石塔寺に住したが、そこは阿育王八萬四千舍利塔の一區であると記されてゐる。現

世利益を祈るための善根としての造塔にも漸く育王山佛舍利塔の影響が現れたことが知られるのである。

殊にこの佛舍利相承系圖の初祖として掲げられた前白河院、即ち白河天皇の天皇としてまた法皇としての治世は延久四年より大治四年に至る五十三年間にわたり、所謂院政の爛熟期に當つてゐる。この時代になると中央集權的律令制度の解體は加速度的となり、公領は續々莊園となつて私領化した。元永二年三月、白河法皇は權中納言藤原宗忠を關白忠實の許へ遣して、上野國の莊園五千町歩を停止した。

中有記元永二
・三・廿五 一國內

に一人の所有する莊園が五千町歩にも上つたとすれば、全體の莊園は尙ほこれ以上相當に上るべく、従つて残るところの公有地は幾許もなかつたに相違ない。後二條師通記に「諸國莊園溢滿す」といつてゐるのは、

後二條師通記寬
治七・三・三

またこのやうに全國

この一例によつて見ても決して誇張ではないことが知られるであらう。次に莊園内の農業生産力の發達は、莊園をその物質的基底とする貴族階級の政權をも支持したのである。たとへばかの「この世をば我世とぞ思ふ望月の缺けたることのなしと思へば」と詠じた御堂關白道長の榮華も、莊園經濟によつて支持されてゐたものであることは「天下の□地悉く一家の領となる。公領立錐の地なきか、悲しむべきの世なり」といふ時人の批評に盡されてゐる。

小右記萬壽
二・七・一

また藤原氏の擅

權を抑へた院政が、先づ莊園の整理停廢より着手したこともこの間の事情を窺はせるに充分である。

かくして大地主化した貴族は莊園によつて富力を獲得し、またこの富力に立つて華美風流の生活が展開された。この華美の風潮はまた現世利益の思想と結んで宗教的儀式をも半ば遊戯化し、陶酔の氣分を横溢させた。維摩會・御齋會・最勝會等をはじめとして、供養・講會・祈禱等公私雑多な儀式があり、しかもこれ等

の儀式の際には莫大な費用が投ぜられ、供物・布施に至るまで高價な舶來品が用ひられた。鳥羽上皇が日頃の數多ある御所に唐綾・唐絹をはじめ種々の珍貨を所狭きまでに愛藏したが、來世の營みのためにこれを全部僧侶達への布施とされたといふのはその一例である。

殊に來世のための善根として、また佛教儀式と密接な關連を有つたものは造寺・造塔・造像事業である。そしてこの造寺・造塔・造像事業は所謂院政時代に最も盛んであつたが、就中白河法皇は土木事業を愛好され、多くの寺塔を建立した。當時の或人が、白河法皇の積まれた御善根は、

繪像五千四百七十餘體

生丈佛五體

丈六百廿七體

半丈六六體

等身三千百五十體

三尺以下二千九百餘體

(寶カ)
七字塔二十一基

小塔四十四萬六千六百卅餘基

金泥一切經書寫

此外祕法修善千萬壇、不知其數、

といつてゐる。中右記大治
四・七・一五その主なものを挙げると、天治二年五月二十三日、法皇は尊勝陀羅尼萬遍、小

塔一萬基、木像等身佛十數體を供養して待賢門院の御平産を祈り、中右記目錄
御産部類記大治二年三月十二日には、白

河北新御堂及び愛染王丈六三體・等身百體を供養し、また法勝寺金堂に於て丈六尊勝佛・同陀羅尼・七寶

塔・小塔一萬基を供養してゐる。中右記
記同十九日にも圓勝寺三重塔供養・法勝寺大威徳丈六像一體・等身像百

體供養を行ひ、同日また三條殿に佛像數體を供養してゐる。中右記・百練
抄・御室相承記以上二三の例によつて窺はれる

が如く白河法皇は頻繁に造寺・造塔・造像を行はれてゐる。そして所謂寶篋印經塔もこの時期より鎌倉時代

にかけて發達したのである。いふまでもなくこの寶篋印經塔は、眞言宗の年頭吉例の寶篋印塔法會の表白文

中に「寶篋印陀羅尼經一切如來分身之光儀、過去諸佛全身舍利也」といつてをるところによつて明かな如

く、佛舍利の代りに納めたものであり、従つてそれは吳越王錢俶の阿育王塔と同様であつて、恐らくその影

響を受けたものに相違ない。

かくして白河法皇治世時代は阿育王塔、即ち阿育王山に對する信仰、従つてまた佛舍利に對する信仰が盛

んであつた。承暦元年五月二十四日・天永三年六月十七日・大治元年七月十八日等に佛舍利を七道の諸社に

納めてゐるのはその一例であり、水左記・中右記
殿曆・皇代曆それに伴つて舍利講も盛んに行はれるやうになつて來た。

このやうに當時の國內宗教界は、阿育王山佛舍利を將來すべき風潮が充分に熟成してゐたのである。

次にしからは當時大陸との交通關係は如何であつたかといふ問題であるが、それは白河院治世に當り、そ

の五十餘年間、宋の商船は殆ど毎年の如くに來航した。殊に同天皇在位時代は、宋は内外政策に最も積極的

であつた神宗時代に當る。神宗は遠夷招致・貿易振興政策をとつて諸外國に使節を派遣したのであるが、我が國にも商船に託して國書・國信物を寄越し、その度數は白河天皇在位十四年間に十回近くにも達してゐるのである。拙著「日宋貿易の研究」第二編第一・二章参照また延久三年には成尋阿闍梨が入宋、翌々年にはその弟子賴縁・快宗・惟

觀・心賢・善久等歸朝、宋僧悟本も隨伴來朝してをり、承曆二年には、宋帝よりの國信物に對する答禮使として僧仲回が入宋する等、僧侶の往來も見られた。従つてその間には育王山の佛舍利が將來される機會もあり得たわけである。

以上のやうに國內に於ける佛舍利信仰の風潮と、また當時の日宋交通の頻繁さより推して、白河法皇が宋の阿育王山・雁塔山より佛舍利を將來したとしても何等不合理ではないのである。また法皇の土木御愛好熱に乗じ、平正盛・忠盛父子が、西國を地盤として貿易によつて得た財力を背景とし、相續々成功によつて法皇の御信任を博し、後宮方面とも親密な關係を結んでをつたのであるが、この相承系圖もこの關係を裏書するが如く、法皇御所持の佛舍利が施妃祇園女御を経て忠盛の子清盛に譲られてゐるのは、平家の政權獲得のために辿つた徑路を窺ふべき一史料ともいへよう。

かくて吳越王錢俶の阿育王塔の渡來があり、次いで所謂育王山佛舍利の將來を見るに至つたのであるが、永承七年愈々末法第一年に入つたとされた所謂末法思想は先づ僧侶達の間には恐怖心を呼び起したが、やがてそれは保元・平治の亂を契機とする封建制成立過程に伴ふ様々な社會不安と結び付いて一般民衆までもこの深刻な悲觀的思想に捲込むに至つた。そしてこの思想は鎌倉初期に入つてその極に達し、所謂五濁末世の

の低落を慨する厭穢欣淨の思想は、やがて人々をして印度の教祖の偉業を追慕せしめるに至り、榮西の如き、また明惠上人高辨の如く、遠く印度の聖跡に巡禮しようとするものさへ現れるに至つたのである。また印度や中國の聖跡巡禮は困難であるので、顧みて自國の教祖聖德太子の業績を偶び、太子に對する追慕崇拝が油然として起り、四天王寺詣でが流行したのである。かゝる風潮を迎へて佛舍利崇拝が旺んとなつたのはいふまでもない。僧侶の間に佛舍利僞造者までも現れたといふことはこの間の事情を物語るものである。毋尾の明惠上人も春日大明神より佛舍利を感得し、この佛舍利を釋迦の形見とも、また春日大明神の御神體とも崇めたといつてゐる。施無畏寺文書

佛舍利信仰は必然的に宋の育王山への憧れを高める結果となる。殊に嘗ては我が僧俗の憧れの的となつてゐた文殊菩薩示現の地たる有名な聖跡地五臺山が金の領土となつてしまひ、この地に巡禮することが不可能となつてからは、我が入宋僧等は専ら天台山・育王山に巡拜するやうになつて來た。玉葉壽永二・俊乗坊重正・廿四

源は育王山に參詣したのみならず、上周防産の材木を海上輸送寄進して育王山舍利殿を建立し、またその修理のため柱四本・虹梁一本を大陸に渡してゐる。南無阿彌陀佛作善集 従つて育王山の名が益々普及したのである。嘉祿元年九月八日、北條泰時が辨僧正定豪を導師として、鎌倉郊外多古江河原に於て八萬四千基の石塔を建てたといふのもその影響である。吾妻鏡 殊に高山寺縁起に明惠上人の髮爪塔のことを記して、

石塔一基
右塔婆者、依敬重上人之德恩、以彼髮爪納此塔婆、塔婆者則模大唐育王塔之形、

といつてゐるのはこの影響が明瞭である。

かくして平安末期より鎌倉初期にかけて育王山信仰が一般民間にまで擴がつて行つた。平重盛が後世の善根のためにと黄金數千兩を育王山に施入したといふ有名な平家物語の「金渡」の卷はかゝる育王山信仰を背景として出來たものであるし、また重盛もかゝる信仰の雰圍氣に在つたことは、この相承系圖に於て育王山佛舍利が父清盛より重盛の弟宗盛へと一門の間に相傳されてゐることによつても窺はれる。

また平家物語「金渡」にも増して奇怪な話は、群書類從卷第四百四十三に收められた「佛牙舍利記」である。それによれば、鎌倉幕府將軍源實朝が或時宋に渡つた夢を見た。夢の中で或寺に赴いたところ、長老が座に墜つて説法を行つてゐた。實朝は僧に向つて寺號を尋ねたところ、能仁寺と答へた。さらば長老の名はと尋ねたところ道宣律師と答へた。律師は入滅して已に年久しいが如何して現在あるかと問へば、聖者は生死無差別、律師今再誕して日本の鎌倉實朝將軍であると答へた。しからば長老の左邊の人物はと尋ねたら、鎌倉の良眞僧都であると答へたといふところで夢が醒めた。ところが不思議なことには、良眞も亦壽福寺開山千光和尚も三人で同じ夢を見た。そこで實朝は深くこれを信じ、爾來張瓊が獻じた道宣律師の牙舍利を拜まうといふ望みを懷くやうになつた。そこで大船を作り、美木金銀貨財を積み、十二人の使を宋都能仁寺に遣し、貨財を獻じ。一年間の期限を限つて同寺の佛牙の借用を申込んだ。同寺の衆僧は評議の結果、これを貸したので、使者はこれを携へて歸朝し、實朝に飛報した。實朝大いに喜び小田原まで奉迎し、神輿に載せて鎌倉に歸り、寺を建て、大慈寺と名付け、舍利を安置し、毎歲十月十五日を以て舍利會とした。その後圓覺

寺に舍利殿を建て、こゝに大慈寺の佛牙舍利を遷した。ところが後光嚴院法皇がこれを拜まんとする御希望があり、夢窓國師疎石を介して交渉されたので、圓覺寺は法皇にこの佛舍利を獻納した。應安七年正月十七日、法皇はこの「佛牙舍利記」の作者僧某に右の佛舍利を賜はつたので、長くこれを子孫に貽さんがためにこの記を作つたといふのが、この佛牙舍利記の概要である。

ところが吾妻鏡を見ると建保四年六月十五日、東大寺大佛造營に従事した宋人陳和卿が鎌倉に下向して、將軍實朝に謁し、實朝の前身は宋朝育玉山長老であり、自分は當時の門弟であると告げた。實朝は去る建曆元年六月三日の夢に一高僧が現れて告げた夢想と符合するので、陳和卿の言葉を信じ、遂に重臣達の諫めをも聞かずに育玉山參詣のため入宋を企て、陳和卿に命じて大船を造らせ、更に扈從すべき者六十餘人を人選した。陳和卿は東大寺大佛造營の際にも兎角の風評のあつた人物であり、隨心院文書乾元久恐らく何らかの打算的な考へがあつたからであらう。兎も角も彼の造つた船は由比浦で進水式を行つたが、海底淺くして船浮ばず、遂に渡海を斷念せざるを得なかつたといふことが見えてゐる。

今佛牙舍利記と吾妻鏡の記事を比較して見ると、夢想の點といひ、宋朝佛舍利關係の名寺院といひ、いづれも共通の點があり、兩者の間には換骨奪胎の關係があるらしく考へられる。それにしても、實朝にもまた當時流行した育玉山信仰の氣持のあつたことは、吾妻鏡の記事を通していひ得るであらう。

この佛舍利相承系圖はかゝる育玉山佛舍利崇拜熱の白熱化した頃の文曆二年に書かれてゐることは興味が深い。またこの系圖に載つてゐる九條道家も育玉山信仰者であつたことは、嘉禎三年十月、道家が宜秋門

院・東一條院に屬從し、西園寺公經等と四天王寺に詣でた際、道家が捧げた阿彌陀經供養願文中に、「昔華陽室が阿育大王の塔に參詣した例に模つて、聖德太子の寺に詣で、佛舍利を拜し、これを供養す」と記してあるところから推察されるのである。

顯文集四、嘉禎三年九月
日法性寺殿阿彌陀經願文

今この系圖を見るに、佛舍利を奉詣してゐる

のは道家はじめ殆どすべて貴族達であるのは、この佛舍利信仰が僧侶より貴族へと擴まつて行つたことを示すものである。そして平安末期より、たとへば重源の如く入宋僧侶の育王山巡拜者も現れて來たが、特に南宋

に入り、育王山が禪刹五山の一として有名となつたので、尺素往來我が禪僧達の巡拜・駐錫するもの多く、榮西

も仁安三年育王山に參拜して佛舍利の放光を瞻禮してをるし、興禪護國論序道元もまた貞應二年五月、渡宋船が慶

永平清規乾
典座教訓

その年の秋と嘉祿元年春の二回にわたつて育王山

に參詣してゐる。正法眼藏佛性その他覺心・靜照・德儉・王證等いづれも育王山に參詣乃至は駐錫してゐるのであ

る。従つて鎌倉時代に入つては育王山佛舍利信仰は禪僧を通して弘められたに相違ない。この佛舍利相承系

圖が文永元年まで書き續がれてゐるのは、この風潮に支持されたからである。尙ほ沙彌玄祐が阿久野玉即ち

眞珠一粒を施入したとこの相承系圖に記されてゐるのは、或は眞珠を佛舍利の代用として乃至は佛舍利に光

彩を添へるため施入したものであらうか。この點興趣を覺えるのである。

以上眺めて來たところによつて明かな如く、この一見何等の特色もなき佛舍利相承系圖も、一度日宋交通

といふ立場から見るとならば、阿育王山佛舍利といふ一點に於て、その根柢を深く日宋文化交渉史に根ざして

ゐることが明かにされるのである。